

箱根吟行

内藤 真理子

その日は正真正銘の秋晴れだった。目的地は箱根湿生花園。

「新宿のバスタでバスに乗った時から吟行が始まっているのだね」等、そここで聞こえるのは、OBペン俳句の吟行仲間の三々五々の話し声。

東名高速はその日が五、十日という事もあり渋滞していた。うつらうつらしながら、大和トンネルを過ぎると、箱根の山々、一子山や、金時山が見えてくる。そして富士山が……。

『旅の華 高速道路に雪の富士』 下手くそな俳句が頭に浮かぶ。

カーブの度に右に左に移動する、巨大な雪を被った富士山に感動を覚える。

旅は良い！ と、つくづく思う。

二時間近く遅れて箱根の集合場所に着いた。直接車で行った人たちが待つてくれている。

久しぶりに会った気分、なつかしさ、嬉しさひとしお。皆で前回の句会で立ち寄った「蕎麦屋」に向かうのも、特別に嬉しい。コロナ禍を挟んでの、何年振りかの箱根逢瀬なのだ。

箱根湿生花園に入って、いよいよ吟行開始。

例年より夏が長く、いまだに気温が高いせいか、紅葉が進まず。そんな中、花園に入ってすぐに、ハロウィーンの飾り付けが目に入った。そしてその奥に、真っ赤なもみじが……。

『青空に紅いもみじの誇らしげ』 と、一句。

久しぶりに行った湿生花園は、思ったよりも広く、見所が沢山あった。沼や、芒の原っぱがあり、そこには、今年ならでは、まだ開き切らない芒が、秋風の中、まだ青い茎をピンと伸ばして硬い表情で風にゆれている。それを見て私は、舟木一夫の『高校三年生』の歌を連想してしまい可笑しかった。

そして宿に帰ってからの句会。

一人三句づつ提出した作品を、選者が読み上げる。

どれも、今見てきた景色が広がる。句にしたかった景色、思いもよらなかった景色の発掘、興味津々。先生の手直しに、新たな感激！と、魂が揺さぶられる。

こんな機会を持たせてくださった、先生やOBペン俳句のお世話役の皆さまに感謝、感謝。そして、白濁した温泉につかってから豪華な夕食。主婦の私にとって、夢のひとつだった。